

# 米欧亜回覧

第67号

発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集委員会

## 八月四日(土) パネルディスカッション開催

### 明治維新と岩倉使節団の意義を問う

#### 「平成維新をどうすすめるか？」

いま、国政は「消費税法案」をめぐり大揺れに揺れている。世界もまた欧州共同体の存続を賭けて必死の調整が行われている。当会でも、その情勢を踏まえ、このところ会員有志をパネラーとするパネルディスカッションが続けられている。「歴史部会」担当による「岩倉使節団は明治国家に何をもちましたか?」、「実記を読む会」主催による「米欧回覧実記と私」、そして今回は「グローバルジャパン研究会」主催による頭書テーマのパネルディスカッションである。

今回のパネラーは、学会から吹田尚一氏(元三菱総研)、実業界から石坂芳男氏(元トヨタ自動車)、官界から塚本弘氏(元通産省・ジェットロ)、そしてIT業界から石垣禎信氏(元日本IBM)の四名で、コーディネーターは泉三郎氏である。

パネラーだけでなく、参会者の一人一人も、明治の志士、岩倉使節団の一員になったつもりで、「平成維新をどうすすめるか?」のテーマに挑み、盛夏の午後の熱さに負けない「熱い議論」が展開されることを期待したい。

なお、二次会は、老舗の蕎麦処「永坂更科」で、ジョッキをあげて大いに飲みかつ談じあおうという趣向：関心のある知人、友人も誘って参加された。

四月全体例会、パネラー・ディスカッションのテーマは、「米欧回覧実記と私」

四月七日、国際文化会館講堂で第六十三回の全体例会が開催された。第一部は、NPO法人としての年次会員総会で、事業および会計報告と計画、役員についての発表と審議が行われた。

第二部は、「米欧回覧実記と私」実記が語ったこと、語らなかつたこと、「」をテーマとした、六名の会員によるパネラー・ディスカッションが行われた。



4月7日全体例会 (パネルディスカッション)

泉理事長の司会進行により各氏が発表した。会場からの質問や意見交換も活発で、終了後の懇親会にも多数が参加し、盛会であった。

(詳細は二〜三頁及び別刷)

#### 十五周年記念出版「小論集」の概要固まる

「記念小論集」のタイトルおよび掲載予定の小論原稿が概ね固まり、編集作業は最終段階に入った。そして、年次総会での呼びかけに応じた多数の賛助によって刊行がよいよ実現の運びとなった。

タイトルは、『「岩倉使節団」と「米欧回覧実記」とし、テーマに沿って三つの章で構成される。十六名の会員が執筆する記念小論集は、B5版・二百三十頁を超える予定で、十五周年に相応しい充実した内容となる。是非、ご期待ください。

(詳細は四頁)

現在の日本の政治状況は深い霧の海を漂っているような感じである。この迷妄を打ち破って明るい未来を切り開くにはどうしたらいいのか。つまるところ「歴史に学ぶ」しかないのではないか。そこで思い起こされるのが「明治維新」であり、「平成維新」が叫ばれ「大阪維新」が話題になることになる。

ならば、その明治維新とは何か、その具体的な実像をあらためて問い直す必要がある。そこでの最大事はまさに「廃藩置県」であり、知るべきはその具体策を実行した「留守政府」の実像であろう。それは「岩倉使節団」と表裏一体をなす動きであり、その実態をしつかり把握しなければならぬ。

### 今、問われるべきは「覚悟」ではないのか 「廃藩置県」と「留守政府」

泉 三郎

ガンは歳出の四割を占めていた武士階級の秩禄(サラリー)であり、二十万士族に転職と退職を強要しなければならぬ事態だった。そのためには巨額な退職金を準備せねばならず外債を募るしかなかった。そこで急遽、大蔵省から吉田清成が米英に派遣されるのであり、吉田はワシントンやロンドンに滞在中だった岩倉使節団の面々と接触して対応策を練ることになる。

その留守政府の諸施策に焦点をあてた好著がある、慶応大学の笠原秀彦教授による「明治留守政府」である。本書によってこれまで個々に研究されていたものが全体像として明らかにされた。それによると、身分制廃止、学制改革、徴兵令、地租改正など大改革が相継ぐ中、緊急かつ最大の問題はやはり財政問題だったという。

時代の大転換期には、それに対応できる大改革が必要であり、それには大いなる犠牲や覚悟が伴う。激しい反対がおき摩擦が起きる。が、それを突き抜けていかなければ改革はできない。どこまで身を切り、犠牲を払えるか、その覚悟が問われるのだ。いま、「平成維新」を敢行するとすれば、国・地方をとわず議員も公務員もまず身銭を切る覚悟が必要である。そして一般市民も種々の既得権益を削り増税に堪えなければならぬ。ギリシャもスペインも対岸の火事ではない、我々はそのことを銘記しなければならないと思う。

第63回 全体例会

NPO年次総会に続き、パネル・ディスカッション  
「米欧回覧実記と私」  
「実記が語ったこと、語らなかつたこと」

平成二十四年度最初の全体例会は、四月七日(土)午後一時三十分より国際文化会館講堂で開催された。今回はNPO法人としての年度替りの総会を兼ねるため、二〇一一年度の事業報告と会計報告および二〇一二年度の事業計画、収支計画、役員の重任などの発表と審議が行われた。

【第一部】年次会員総会

総会に先立ち出席者の確認が行われた。正会員数二百二十名、出席者百八名(うち書面表決者七十名)となり、正会員の半数以上の出席を得て総会は有効に成立した。



第63回全体例会・年次会員総会参加者  
(4月7日・国際文化会館)

まず、議長に泉三郎理事長を選出、議事に入った。議題及び審議の内容は以下のとおりである。

■議題

- ① 理事長の挨拶と二十四年度の会の方針について
- ② 楠木監事より二十三年度の会計監査報告
- ③ 平成二十三年度の事業報告ならびに決算承認について
- ④ 平成二十四年度の事業計画ならびに収支予算について
- ⑤ 役員選任について

■参照資料の配布

平成二十三年度(二〇一一年度)活動報告および会計収支計算書(平成二十三年四月〜平成二十四年三月)、「米欧回覧の会」平成二十四年度(二〇一一年度)事業計画書および会計収支予算書(平成二十四年四月〜平成二十五年三月)等の資料が出席者に配布された。

■審議内容

① 会の設立十五周年となる今年度は岩倉使節団の百四十周年にもあたり、昨年度より取り組んできた「十五周年記念小論集」も会員各位のご協力

(別紙参照)



石垣事務局長(司会)

により発刊の目処がついた。泉理事長よりは「昨今の日本の状況を考え、会としては『百四十周年』を合言葉に意欲的な事業を展開していきたい。各部署の活動に加えて、会員各位のさらに積極的な参画をお願いしたい。」との挨拶があった。

② 二十三年度の事業ならびに会計報告につき適正であると報告がされた。

③ 資料により詳細説明、審議の結果承認された。

④ 資料と各部署の幹事からの詳細説明、審議の結果承認された。

⑤ 重任理事(四名)：泉三郎、塚本弘、近藤義彦、石垣禎信  
重任監事(一名)：楠木孝雄  
退任理事：藤原宣夫

(文責) 石垣 禎信  
(写真) 近藤 義彦



理事退任の挨拶をする藤原宣夫氏

【第二部】パネル・ディスカッション

■テーマ  
「米欧回覧実記と私」(実記が語ったこと、語らなかつたこと)

岩倉使節団百四十周年の今年度に、もう一度「回覧実記の価値」を再発見しようとの趣旨で、会員の研究成果を集約したパネル・ディスカッションが行われた。パネラーは、芳野健二氏、小野博正氏、桑名正行氏、小林富士雄氏、岩崎洋三氏、小松優香氏の六名、モデレーターは泉理事長が務めた。各氏の興味深い発表の後、会場からも活発な質問や意見が続き、当会に相応しい知的かつ創造的なディスカッションとなった。

■発表要旨

○芳野健二「実記とアジア観」

久米にやや欠けていた(報告者としてやむを得ないが)アジアへの考察を深めることが、当会(名称が米欧亜)の設立趣旨でもあろうと「実記とアジア観」を論じてみた。

久米自身は、「アジアにこそ利益の伏蔵あり」と資源に着目している。同世代の福沢は十年後、「東アジアの盟主は日本」であり「日本自国の類焼を予防するの要あり」と脱亜入欧を主張するようになる。その後の日本の歩んだ道



第2部・パネルディスカッション

も、久米のいう東南アジア資源論と、福沢のいう盟主論の展開としての「大東亜共栄圏」であり、究極は一九四三年の御前会議における「マライ・スマトラ・ジャワ・ボルネオ・セレベスは帝国領土と決定」というむきだしの植民地主義となった。

戦後も賠償やODAなどあるが、マクロな視点からの「自己抑制」が必要なのではないだろうか。

○小野博正「『実記と私』—私流の読み方」

『実記』を読むのも二巡目に入る。一八七〇年代の世界を輪切りにした百科辞典的面白さと、そこを基点として前後左右に歴史を考える魅力に加え、多士済々の会友との語り合いの楽しさがある。  
「歴史とは過去と現在との



パネラーの芳野氏、小野氏、桑名氏 (左から)

対話である」との信条のもとに、現代と未来を考える糧として学んでいる。久米実記のお陰で、主要使節団員の岩倉、大久保、木戸や伊藤達は何を見て、何を感じて、その後日本の「国のかたち」造りにどう生かされてきたかが検証可能となっている。

明治維新は、世界的に見ても、国民国家、産業資本主義、民主主義の勃興期の絶妙の時代であったことに気付かされる。久米や使節団は、「彼我の差は、僅かに四十年に過ぎず」と捉えて、明治日本の、進むべき道が見えてきたことが、この使節団の最大の成果であった。そして、明治維新を興した力は、江戸時代の文化力が、決して世界に遅れていなかった事実にも気付かされる。

○桑名正行氏「実記の語らぬ日米『不平等条約』改正交渉

―それは失敗であったか―  
この年の日米外交は、言うなれば向米一辺倒であった。日英関係は、討幕闘争いらいの英国依存をアメリカに乗換えていた。米英外交関係は、南北戦争いらい引き続き悪化、グラント大統領の対英強硬対外膨張政策は一貫しており、とりわけ「アラバマ号」問題―英国の局外中立義務違反は米国民の激怒を買う―は屢々英米国交の危機をもたらしていた。一八七二年は大統領並に上院一部の改選期に当たっていた。まさにこの年の二月、岩倉使節団はワシントンに到着していた。

二月三日、第一回会談の席上(本格交渉(調印)に入るには全権委任状が要る)とフイツシュ長官。二月五日、第二回会談で岩倉は副使を帰国させ全権委任状を取付ける。副使帰任まで交渉(談判)続行を要請。(岩倉、大久保はこの時点での選択肢は本格交渉に応ずる以外になし、と読みきった)。

大久保、伊藤は米・日を往復。この間、数回の会談(交渉)が続けられたが、使節団の本格交渉に一驚した英・独筋(駐日公使ら)より、「最惠国約款」を振りかざして忠告とも恫喝ともつかぬ横槍が入り、岩倉一行は急遽交渉を中断、米側に理解を求めつつ

英国に向った。  
ここに岩倉・大久保らの現場における優れた危機管理能力を視る。表面上の結果だけをみて、「失敗」「失敗」よばわりする論調は、近視眼のそしりをまぬがれない。

○小林富士雄氏「実記に見る森林の旅」  
アメリカ、イギリスともに、長滞在の割に森林や樹木の記述は極めて少ない。ともに森林問題を論じ会う余裕などなかったのが実態。ただ、イギリスのスコットランド旅行は森林と風景の記述多く、その最後には「都市のみで文明を論ずるのは誤り」とある。

フランスは、もしも地方に足を伸ばしていたら、世界で最も古い「森林法」をもつことなどを学んだであろうにやや残念。ベルギーあたりから漸くヨーロッパ大陸の森林に目が向くようになり、文明の基盤にある森林と森林管理の重要性が述べられる。オランダは治水技術に関心を示す。ドイツでは、森林の歴史、管理の技術、森林の所有関係、森林法などの解説がされる。

ロシアでは大森林国とは書いてはいるが、ウラル山脈以東には全くふれていない。デンマークを経てスエーデンに入ると、各地で製材鋸の音が満ち満ち、しかも無駄なく有効



モデレーターを務める泉三郎氏

利用している様子が述べられる。南ドイツは木材がライン川を経て輸出される記述があり、イタリアでは土地利用のあり方が論じられる。オーストリアでは山岳地帯から木材を輸出している。

最後の第五巻。地中海から見る土壌はこれまでと違い痩せて赤い。スエズ運河に入り、かつて草木豊かな土地が一木一草なくなつたとある。セイロン島に着くと、「真に人間の極楽界と覚ぶが如し」とある。上海に寄港したあと、緑溢れる日本列島に感動し、五十日間の船旅を終える。



小林氏、岩崎氏、小松氏 (左から)



懇親会も盛会  
全体例会終了後、風林で開催された懇親会に多数の会員が参加し、ディスカッションと懇親の楽しい時間を過ごした。

○岩崎洋三「フルベッキと私」

使節団派遣や『実記』、このような並外れた計画を誰が企画したのか。一八五九年に二十九才で長崎に着任したフルベッキというアメリカ・オランダ改革派の新米プロテスタント宣教師が、双方に大きな役割を果たしていた。

まず、一八六九年にフルベッキは条約改正交渉に備えて政府海外視察団を派遣すべしとしてその陣容、役割分担、訪問先、調査内容、報告書作成までの実践的な派遣計画をBrief Sketchという文書にして、大隈重信に提出している。反発を恐れて手をこまねいている内に大隈使節団構想はつぶされてしまうが、一八七一年十月に至って岩倉具視から直々に求められて、フルベッキは提言書を再生の上、岩倉邸で逐条説明する。岩倉使節団の団員構成、訪問先、調査事項はほぼその筋書きで実施された。

別途、①大使一行の回歴したる顛末を著述する法や、②談判に於いて用ゆべき口啓と題する細部にわたる具体的な手引書をひそかに使節団首脳に提出していた。『実記』の体裁は、単に久米の趣味だけではなかった。赤坂で急逝するまで滞日三十九年間「国造りコンサルタ

ント」とも言えるほどの目覚しい活躍をしている。切支丹禁制の時代にプロテスタント宣教師がかくまで頼りにされたのも大きな驚きである。

○小松優香「米欧回覧実記と小国」

使節団が、大国同様、小国にも公平に目を向けている点は非常に評価すべき点である。

小国の特質の第一が「大国の狭間で小国がいか生きてきたか」ということ。久米は、軍事的、経済的理由、戦争の勝敗によって国の領土が決められていたことを批判し、「言語、宗教、風俗などの文化的規定によって民族はまとまり一体化する」とする。このことは現代の国際関係にとっても重要な考え方であると思う。

次に教育。久米は「日本は道徳教育、ヨーロッパは実利教育である」と言っている。現代でも、北欧では教師は修士号を持つていることが条件とされ、最も優秀な先生は小学校の教師に採用されている。

続いて「風土」。産業の限られた小国では、景観、自然を大事にしながら生きていく様子が見て取れる。これは日本人の自然観と似ているところでもある。以上のように、実記には小

国の生きる知恵が描かれており、今日のグローバル化の問題においても示唆に富む点多くあるように思う。

(文責) 小坂田 國雄

年会費・十五周年記念小論集発刊賛助金・NPO活動支援の寄付

お払込みのお礼とお願い

事務局長 石垣 禎信

四月の年次会員総会で、ご賛同をいただきました上記のお払込み状況をお知らせします。みなさまのご支援とご協力で、六月十五日現在ですでに七十六名の会員の皆様から総額九十三万円の払込みをいただいています。記念小論集の賛助は四十六名、NPO活動支援の寄付は五十八名となっております。例年の会費のお払込状況から考えますと、更に多くの会員の参加を確信しておりますが、皆様には一層のご支援とご協力をお願いいたします。特にNPO活動支援への寄付は、寄付金の税額控除可能となる「認定非営利活動法人」へ移行するためには百名以上の参加が条件となっております。金額もさることながら参加人数を達成するために、既にお払込みの皆様も含めもう一段のプロモーションとご支援を心からお願いたします。

口座番号:00180-2-580729

小論集

「岩倉使節団」と「米欧回覧実記」 主な掲載小論(一部仮題)

A「岩倉使節団」と留守を支えた人たち

①岩倉具視「国の形を探り続けた男(山田哲司) ②悩める企画者、木戸孝允(芳野健二) ③大久保利通に学ぶ(大平忠) ④伊藤博文と米欧体験(大政治家誕生の秘密(泉三郎) ⑤フルベッキと岩倉使節団を企画したプロテスタント宣教師(岩崎洋三) ⑥光風霽月の人・西郷南洲を漢詩で迎る(小野寺満憲) ⑦大隈重信と佐賀藩(小野博正)

B「岩倉使節団」と「米欧回覧実記」をめぐると小論

①「米欧回覧実記」を現代語にしてみてー久米邦武との二人旅(水澤周) ②「米欧回覧実記」における森林の記録について(附)岩倉使節団と日本林政との関連(小林富士雄) ③岩倉使節団とフランスー明治の日本人に見えなかつたものー(市川慎一) ④オランダでの使節団と久米邦武ー西洋美術とのめぐりあい(多田幸子) ⑤岩倉使節団視察・実記についての検証ー明治東京の「市區改正計画」を例としてー(堀江興) ⑥十九世紀米欧高等教育モデルと日本モデル形成ー岩倉使節団の米欧高等教育回覧ー(大森東亜) ⑦岩倉使節団をめぐると三つの謎(小野博正) ⑧明治維新の不思議さー社会大改革のコストと岩倉使節団が果たした役割(難波康照)

C「岩倉使節団」の旅を追って

①「岩倉使節団」追跡の旅(泉三郎) ②チャールズ・ウォルコット・ブルークスと岩倉使節団(三原浩) ③久米邦武追っかけの旅(鶴飼直哉) ④「実記」を読むーベンガル湾の旅(桑名正行) ⑤岩倉使節団の帰国(三原浩)

十五周年記念出版「小論集」、会員の期待を背に編集の最終段階

「岩倉使節団」と「米欧回覧実記」に関する小論募集に応じた、質の高い投稿が多数届き、一部の執筆者にお願いしていたテーマに即した加筆や頁数の短縮も概ね終了した。編集委員会では、それらを

中心にした全体の構成が検討され、小論集の骨格を右記のように決定し、七月末の発刊目標に向け、巻末の当会の小史執筆や最後の手直し段階となった。なお、今回掲載できなかった原稿、論文や資料なども多くあり、今後、何らかの形にまとめて公開・刊行することも課題として認識さ



3月21日歴史部会 (講師: 仲津氏)

### 歴史部会報告

担当幹事 小野 博正



mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

官・水兵とともに廻航され、

■近代治水の創始デ・レーケの画期的業績 (講師: 仲津真治氏)  
三月二十一日開催。  
幕府はオランダから軍艦輸入を決め、スピン号が将校・下士

れている。事務局長のお礼(四頁)にあるように、多数の会員の賛助があり、いよいよ記念小論集発刊が実現できることになった。会員の方々の期待の大きさを強く感じるとともに、ご理解・ご協力に感謝します。間もなく、賛助された方のお手元に小論集が届く、賛助を検討されている方はお早めに。

幕府海軍の伝習所となった(一八五五年)。これが、本邦初の「お雇い外国人」。  
官雇いの総数は千八百七十四名。明治七・八年頃がピークで、明治三十年代にほぼ居なくなつた。イギリスが多く七割、フランス二割、あとアメリカ、ドイツ、その他。  
高額な報酬を当然の如く要求、明治政府は、やむを得ぬとして応じ、本邦大臣並みの報酬を支払い、母国の十倍二十倍に達した。高度の教養、専門知識、技量を持ち、各々の分野で、誠心着実に明治日本の建設に貢献、その発展の基礎を築いた。  
明治期は開国、殖産興業のため、治水・港湾の整備が緊要となり、経済の中心の大阪で問題が典型的に現れた。三百年近いお付き合いのあるオランダに依頼が行つた。明治五年から六年にかけて、土木技師四名が来日、その中にデ・レーケがいた。  
デ・レーケは現場を分担、ために日本人と接する機会が多く、その人望が高まつていった。淀川の修築工事が大久保内務卿の承認を得て計画されるに至り、ここに日本初の近代河川改修が始まつた。これが顕著な効果を上げ、デ・レーケは、対日指導の中心的な立場に立つた。  
明治十七年、一等工師と

なつたデ・レーケに建野大阪府知事から、長年の懸案であつた大阪港の築造計画を任せるとの依頼が来た。それは、大阪港の全体計画と新淀川の開削へと結実した。  
また、木曾三川改修計画は、積年の問題悪化に業をにやした愛知・三重県令が熱心に蘭人の派遣を陳情するに至り、明治十年にデ・レーケが赴任。明治二十年、遂にデ・レーケ立案の木曾三川改修計画が日本人の手で着工されるに至つた。  
デ・レーケが日本に三十年も定住・活躍した理由は、庶民階級の出身で現場型で力を付け、次第に理論面でも伸張し、全体と長期を見る視野と技量を得て、大計画の立案を任されるようになったこと。  
最終の地位は高く、勅任官扱いの内務省技術顧問となつた。それに、松方正義大蔵卿や山県有朋内務卿などのバックアップも得ていた。  
明治三十六年帰国、オランダ女王から勲章位を受け、一九一三年死去、享年七十歳。  
(文責) 仲津真治

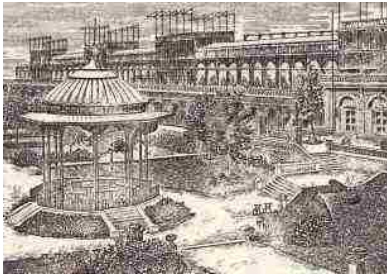
#### ■幕末維新期の海外派遣使節と留学生(講師: 泉三郎氏)

四月十六日開催。  
幕末・維新期の海外派遣使節団、留学生の研究は、岩倉使節団派遣にいたる前史をなすものとして、既に幾多の実績が出されている。発表はそれらを具体的に使節団別、派遣した藩別、目的別、年次別、など縦横に分類し、それぞれの人物を論じ、その後の人生を成功、失敗取り混ぜて紹介したもので、まさに論じ来たり論じ去つて止まるところを知らずの感があり、幕末・維新の諸群像を全体として把握してこそ可能な作業で、これまで積み重ねてこられた岩倉研究の集大成を示したものと見えよう。  
なかでも、ユニークであつたのは、人物それぞれの一生を、順風成功組、波乱万丈組、挫折再起組、病憤死組に分けて論じた試みである。これは、歴史とは「人間の物語」であるとのメッセージに他ならない。  
このような研究は、会員各位により、さらに掘り起こされ、深められて行くこと(例えば、岩崎洋三氏が進めているフルベッキとラトガース大留学学生の研究)、そして結果として、明治維新の研究が人物研究を柱に、より総合的に展開されることが期待され、今回の発表がその基礎を提供するものとなることを願うものである。  
また、今回は二十歳代の若手の参加もあり、昨今の若者の留学離れについて、明治と現在の環境の違い(知識・情



4月16日歴史部会 (講師: 泉氏)

報の入手の容易さ、大学のグローバル化など)、個人個人の主体的問題意識の有無などが議論され有意義であつた。  
E. H. カーによれば「歴史とは、過去と現在の絶えざる対話である」。泉氏が発表最後で提起した「もしこれらの人物たちが現在の日本を見たらなんと言うだろうか」との問いかけは、閉塞感のある日本の現状を見るにつけ、現状と真剣に対峙して、我々が考えるべき責任と行動を見詰める直そうとの問題提起でもあろう。昨今、幕末維新の研究は、学問的にも、資料的にもさらに進展を見ており、それらの成果を吸収し、より高度な議論を部会のなかで展開したいものである。  
(文責) 山田哲司



サウスケンジントンの常設博覧会場(『実記』)

服喪中でもあった)で、百二十日滞在することになる。サウス・ケンシントン博物館で、久米は、英国との差は僅かに「四十年に過ぎない」との感慨を述べる。つまり、僅か四十年なら、努力次第で追いつけるかもという希望として捉えたといえる。

実記を読む会報告

担当幹事 桑名 正行

Tel&Fax 03-3642-9570

mkuwana@nifty.com



■ 第一百五十九回

三月八日開催、出席九名。第二十三、二十四、二十五巻ロンドン市の記

ア女王が避暑休暇中(実際は夫君がチーフスで亡くなり

の、使節団回覧の僅か二三年前に過ぎなかった。一行は、この後、海辺の保養地のブライトン市を見、ポーツマスの英国海軍基地で海軍力に目を眩り、海防を考

され読まれていたことに気付く。つまり、日本の近代は、江戸時代中期には、すでに始

が、スマイス在学当時の校舎ではなく、一八七〇年に移転してきたばかりであった。スマ



第160回実記を読む会(4月12日国際文化会館)

迎って見た。(文責) 大森 東亜

■ 第一百六十回

四月十二日開催、出席者十名。第三十巻 哥羅斯哥府ノ

グラスゴー滞在は十日間。一行十一名は上院議員ブラン

久米が、僅か四十年の差と考えた自信は、どこから来たのかを考えた。一八六五年日本を訪れたシュリーマンは、日本は『蒸気機関なくして達成しうる最高の文化を実現している』と評価した。江戸時代、日本に豊かな農業と前工業化の文化の粋があったと言

一七〇〇年代には、全国に八千五百の寺子屋や藩校があ

このグラスゴーの巻では久米が所感を交え、「商人の集

「一」製鉄所/工作機械工場

達していた事実。恐らく、世界一の出版文化があり、江戸に六百五十軒、大阪に三百軒の本屋があり、武士、商人は

グラスゴーといえば、グラス

「二」鑄鋼工場

「三」綿紡績工場

る「機械による梱包!に驚嘆—久米は梱包の重要性を講釈する。〔四〕綿織物卸商メンデル社で:漢字ブランド『面遮士打、三面道路』(マンチェスター、サム・メンデル)と布地に記す。梱包姿は「石の塊」のよう。〔五〕九月四日、「今日は日曜日なので市内の人々はみな戸を閉ざし、:労働者が多いからだろうか」フランス文芸史家テーヌによる似たような記述がある。「(一八七二年)雨の日曜のロンドン。商店は閉まり、街路にはほとんど人影がない。墓石が整然と並んだ墓場のようだ。:ぞつとする」

「六」九月五日、「早朝、テンペランス(禁酒・禁煙)協会の人々が来訪、スピーチをとり交した。米・英両国が特に厳しい、協会が成立するゆえん」。さて、翻って遠視鏡で視れば、海賊時代、奴隷貿易、植民地開拓、アダム・スミス、ワット、そして一八四四年のエンゲルス「イギリスにおける労働者階級の状態」を経て、つまり一七七〇年から一八七〇年の百年間で産業革命が達成され、世は「ヴィクトリア朝盛時」に突入、これから大英帝国の大盛時に向わんとするまさにその時節、そこに例の、貴族、平民それぞれ「プロテスタントの職業倫

理」といった雰囲気が感得される。使節団は良い時期に回覧した。(文責) 桑名 正行

英訳実記を読む会報告

担当幹事 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

iwasakiyz1116@gmail.com



理」といった雰囲気が感得される。使節団は良い時期に回覧した。(文責) 桑名 正行

■第百回

三月十三日開催  
Ch. 79 A

General Survey of The Country of Austria p. p. 361-377

現在のオーストリアは人口約八百三十六万人、面積約八万四千km<sup>2</sup>であるが、使節団が訪

れた頃は、オーストリア・ハングリー帝国としてハプスブルグ家のフランツヨーゼフ一世が君臨し、人口約五千万人、面積は約六十二万五千km<sup>2</sup>を支配領域にもち、ヨーロッパの中でロシアに次ぎ多民族を支配していた。帝都ウィーンは繁栄し、ハンガリーは首都のブダペストは近代化され、空前の繁栄を謳歌していた。

さて、英訳実記を読む会は、記念すべき第百回を迎えたので、有志で近くのレストランでワインで乾杯をして、ささやかにお祝いをした。

■第百一回

四月十九日開催、出席者六名、Ch. 80 Travels in

Austria and a general survey of City Vienna

一行は、六月三日、伊ヴェニス領からトリエステ付近で国境を越え、列車で現在のスロベニアを東進北上、ウィーンを目指した。山岳地帯の険しく美しい風景を、特にゼメリング山塊のそれを最高として記述している。また久米は、通過した地名を書き連ねているが、訳者指摘の通り通過順序が正確ではない。

この日午後十時に到着したウィーンについての記述は、その起源、歴史、城壁・建築物やリングシュトラッセなどの道路などによる街の成り立ち等に関しベルリン・パリ或いはロンドン等と比較しながら進められ、更には、オーストリアとプロイセンの国民性の比較、オーストリアの政治機構にも及んでいる。

訳者は、その注(Notes)で久米の記述の資料の多くは、The Statesman's Year Book (1870年版) によっていると推察しており、幾つかの誤りも指摘している。軍の連合演習、万博も見学。(文責) 永島 脩一郎

■第百二回

五月八日開催、出席者六名、Ch. 81 A Record of the City of Vienna; With a General Survey of the Country of Hungary, Vol.4

pp395-412

永島会員宅での、テーブルを囲んでの勉強会は大学院ゼミのような懐かしい雰囲気がある。

前回のウィーン市概説に引き続き、兵器博物館と帝室の宝庫見学、カトリックの典礼の華である聖体行列と洗足木曜日(の行事、及びハンガリー国の概説である。

兵器博物館ではウエントェル銃、ウインチェスター連発銃にあたるものをみているが、ガットリング銃を「転発砲車」と表現するなど久米の苦心が偲ばれる。久米にはなじみのなかった「純粋ノ羅馬カトレイキ教国」(古教ノ遺風)たるキリストの聖体行列や王侯が貧しき男女の足を洗う洗足木曜日の典礼など、コーニツキ氏の英訳で読むとまことに理解しやすい。

ハンガリーの近況について久米はオーストリアの(モレシー)氏の著述を参照したとあるが、コーニツキ訳注により医者で農業問題評論家のイストヴァン・モローツ博士(1856-1911)のことであることがわかった。

リンツ經由ウィーンからザルツブルグへの旅の久米による記述にはいくつかの誤解、矛盾があることも指摘されている。(文責) 斉藤 恵子

関西支部報告

担当幹事 難波 康熙



namba@jttk.zaq.ne.jp

■第五十九回  
四月二十五日開催、出席者七名。

輪読は第二編(英吉利国の部)の第二十八巻「漫識特府(マンチェスター)ノ記上」のはじめから。四日市市の会員、鈴木善幸氏にお願いして、板ガラス製造技術やその経緯に関する資料などを事前に送って頂いていたが、それらが輪読する上で大変参考になった。

鉄は日本では太古から生産していたが、ガラスは明治までは外から断片的に入ってきたに過ぎない。板ガラスは単なる透明な板ではなく、戸板や雨戸という仕切りによる遮断から、海外という外の社会への解放と透明性のシンボル、文明開化のシンボルでもあったのかも知れない。

使節団もイギリス、ベルギー、イタリアの三カ国で、七ヶ所ものガラス工場を見学している。ただガラス工業の興隆著しいアメリカと、板ガラスや鏡ガラス製造の伝統を誇るフランスでは工場を見学していない。むしろ不思議と言えよう。(文責) 難波 康熙

特定非営利活動法人

### 「米欧亜回覧の会」ご案内

**趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。  
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。  
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

**会員** 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

**例会** 年に4回、全体例会があります。

**部会** テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

**機関紙** 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

**役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

**会費** 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

**事務局** 「米欧亜回覧の会」  
〒135-0021  
東京都江東区白河 4-9-14-1407  
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp  
TEL:090-4723-9705 FAX:03-3641-9407

#### 入会申込

入会申込書はホームページと事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。  
なお年会費などのお支払は下記の口座への郵便振込が便利です。

00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

#### ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等  
また、書籍・DVD案内もあります

<http://www.iwakura-mission.jp>

\*お知らせ欄も時々チェックしてください



## <催し案内>

2012年7月～9月の予定です

### ☆8月全体例会

日時：8月4日(土) 13:30～17:00  
(第1部) 全体例会 13:30～14:00  
(第2部) パネルディスカッション 14:30～17:00  
(グローバルジャパン研究会担当)

テーマ：今、明治維新と岩倉使節団の意義を問う  
～平成維新をどうすすめるか？日本の未来は？～

パネラー：吹田尚一氏、石坂芳男氏、塚本弘氏、石垣禎信氏(全員当会々員)

モデレーター：泉三郎氏

場所：国際文化会館403・404(会費2,000円)

懇親会：永坂更科麻布総本店(会費5,000円)

### ☆実記を読む会

\*奥多摩園にて映画鑑賞と納涼の集い(1泊2日)  
映画「天皇の世紀」(大佛次郎原作)鑑賞会  
7月12日(木)～13日(金)一般会員の参加歓迎  
申し込み・問合せは、担当の橋本氏まで

日時：9月13日(木) 14:00～ 担当：鶴飼氏

場所：国際文化会館Cルーム(会費1,000円)

### ☆英訳実記を読む会

日時：7月25日(水) 14:00～ 担当：岩崎氏  
\*15:30～ 100回突破記念パーティ  
(会費2,500円、最寄り駅 成城学園前)  
9月20日(木) 14:00～ 第84章スイスの記

### ☆歴史部会

日時：7月24日(火) 18:00～21:00  
「薩摩藩第二次米国留学生・大原令之助(吉原重俊)を語る」(吉原重和氏)  
9月20日(木) 18:00～21:00(読書会)  
『最後の将軍』(司馬遼太郎)を読んで徳川慶喜を語る。(参加者全員で)

場所：国際文化会館(会費1,000円)

### ☆関西支部例会

日時：6月30日(土) 12:30集合～16:30  
昼食懇談会を持ち、13時より会合。

場所：大阪弥生会館

会費：1,500円+昼食代1,000円くらい

#### 編集後記

◇今号は、四月例会記事や部会報告など盛りだくさんで、年次総会の資料を掲載するために三年ぶりの増頁(別刷)となりました。それでも、全体例会や部会報告では長文が多く、かなり文章を割愛させていただいた報告があります。ご容赦ください。

◇全体例会での会員によるパネル・ディスカッションは好評で、昨年十一月(歴史部会担当)、今年四月(実記を読む会担当)と、いずれも盛況でした。続いて、八月の全体例会は、グローバルジャパン研究会担当のパネル・ディスカッション「今、明治維新と岩倉使節団の意義を問う」が開催されます。「〇〇維新」がかつてなくメディアに登場するようになりましたが、現代は、それらの言葉をたちまち消費してしまう過剰な情報社会でもあります。「岩倉使節団の意義」という維新の礎を外さない、当会ならではのパネル・ディスカッションに期待します。

◇主な催しの写真撮影はいつも、橋本吉信さんでしたが、四月例会はお休みで、近藤理事に撮って頂きました。お名前は記載していませんが、歴史部会や実記を読む会の写真は、今号を含めて殆ど橋本さんです。



米欧亜回覧の会 平成23年度(2011年度)活動報告 (平成23年4月～平成24年3月)

	全体例会	実記を読む会	英訳実記を読む会	歴史部会	グローバル・ジャパン研究会	広報・メディア委員会	関西支部	15周年記念小論文集編集委員会
平成23年 4月	第59回例会(5/8) NPO総会 「大災害から如何に日本の再生をはかるか」 パネル・ディスカッション	第150回(4/14)	第91回(4/21)	「幕末から終戦まで 木戸孝允と木戸幸一」 芳野健二氏(4/18)				
5月		第151回(5/12) 第8巻市高鉄道の記 第9巻市高鉄より 華盛頓府鉄道の記	第92回(5/19)	「西郷南州が残した 日本精神の記憶」 小野寺満憲氏(5/16)			第54回例会 (5/14)	編集委員会 (5/27)
6月		第152回(6/9) 第6巻ネヴァタとユタの記 第7巻ロッキー鉄道の旅	第93回(6/16)		「今こそ日本の文化力を 世界に発信しよう！」 近藤誠一氏(6/1)	会報63号		
7月	第60回例会(7/23) 「簡素なる国へ、政治を どうする？」 中村敦夫氏		第94回(7/21)	「山県有朋とその時代」 永富邦雄氏(7/19)	第60回例会(7/23) 「簡素なる国へ、政治を どうする？」 中村敦夫氏			
8月								
9月		第153回(9/15) 第12巻華盛頓府ノ記中 第13巻華盛頓府の記	第95回(9/15)	「伊藤博文—明治国家を 創った男」 泉三郎氏(9/20)				
10月	第61回例会(11/5) 「岩倉使節団は明治国家に 何をもたらしたのか」 パネル・ディスカッション	第154回(10/13) 第19巻新約克府ノ記 第20巻波士敦府の記		「フルベッキ—明治のに 国造りも貢献した プロテスタント宣教師」 岩崎洋三氏(10/17)		会報64号	第56回例会 (10/22)	編集委員会 (10/20)
11月		第155回(11/10) 第10巻コロンビア島の総説 第11巻華盛頓府ノ記 上	第96回(11/17)	「『岩倉具視』—国の形を 探り続けた男」 山田哲司氏				
12月		第156回(12/8) 米国編「北部遊覧ノ記」 第14、15、16巻	第97回(12/15)			会報65号	第57回例会 (12/10)	編集委員会 (12/6)
平成24年 1月	第62回例会(1/19) 「新年懇親例会」 テーマ「インド」	第157回(1/12) 第21巻吉利国総論 第22巻倫敦府総論	第98回(1/19)		第62回例会(1/19) 「新年懇親例会」 テーマ「インド」			
2月		第158回(2/9) 第26巻リヴァプール市の記上 第17巻リヴァプール市の記下	第99回(2/16)	「大隈重信と佐賀藩」 小野博正氏(2/20)			第58回例会 (2/15)	編集委員会 (2/9)
3月						会報66号		編集委員会 (3/8)

米欧亜回覧の会 平成24年度(2012年度)事業計画書

事業名	事業内容	実施予定日時	実施予定場所	従事者(NPOスタッフ)の予定人数	受益対象者の範囲と予定人数	支出見込額
講演会	講演会年6回、交流・ 交歓会年1回	5月、6月、9月、10 月、11月、1月	国際文化会館他	各回 5～10名	会員/一般市民: 講演会(各 回)約50名、交流・交歓会90名	120万円
部会活動(注)	研究及び啓発活動	部会により毎月又は 年4回	国際文化会館他	各回 3～5名	会員/一般市民: 各回約25名	上記に含む
会報発行	会報発行による研究・ 啓発活動	季刊(年4回)	事務局他	各号 5～10名	会員/一般市民: 各号約500部	36万円
15周年記念小論集 発刊	小論集編集/発刊による 研究・啓発活動	7月	編集委員会・事務 局他	約10名	会員/一般市民: 約200部	30万円

1. 事業実施の方針 平成23年度の事業の中心を、講演会、部会活動、会報(ニュース)発行、15周年記念小論集発刊の4本柱とする。

2. 事業実施に関する事項は上記のとおり。

注) 部会とは以下の7部会のことをいう。

実記を読む会/英訳実記を読む会/歴史部会/グローバルジャパン研究会/関西支部/  
広報/メディア委員会/15周年記念小論集編集委員会

## 平成23年度(2011年度) 会計収支計算書

平成23年度  
特定非営利活動にかかる事業  
会計収支計算書平成23年4月1日から  
平成24年3月31日まで特定非営利活動法人  
米欧亜回覧の会

科 目	金 額		
I 収入の部			
1 会費・入会金収入			
入会金収入	20,000		
会費収入	701,000	721,000	
2 事業収入			
講演会等事業収入 (部会活動収入を含む)	1,083,000	1,083,000	
3 寄付金			
現未来部会から	50,324		
会員から	10,000	60,324	
4 その他収入			
利息収入	106	106	
当期収入合計(A)			1,864,430
前期繰越収支差額			1,103,778
収 入 合 計(B)			2,968,208
II 支出の部			
1 事業費			
〔1〕 講演会等事業費	1,143,787		
〔2〕 会報発行事業費 (印刷費)	330,170 (173,650)		
(郵送費)	(156,520)	1,473,957	
2 管理費			
電話・通信費	247,017		
会議費	108,045		
事務費	294,698		
事務委託費	280,000	929,760	
当期支出合計(C)			2,403,717
当期収支差額(A) - (C)			△539,287
次期繰越収支差額(B) - (C)			564,491

## 平成24年度(2012年度) 会計収支予算書

平成24年度  
特定非営利活動にかかる事業  
会計収支予算書平成24年4月1日から  
平成25年3月31日まで特定非営利活動法人  
米欧亜回覧の会

科 目	金 額		
I 収入の部			
1 会費・入会金収入			
入会金収入	50,000		
会費収入	720,000	770,000	
2 事業収入			
講演会等事業収入 (部会活動収入を含む)	1,200,000	1,200,000	
3 賛助金・寄付金	600,000	600,000	
4 その他収入			
利息収入他			
当期収入合計(A)			2,570,000
前期繰越収支差額			564,491
収 入 合 計(B)			3,134,491
II 支出の部			
1 事業費			
〔1〕 講演会等事業費	1,200,000		
〔2〕 会報発行事業費 (印刷費)	300,000 (180,000)		
(郵送費)	(120,000)		
〔3〕 15周年記念小論集発刊事業費	300,000	1,800,000	
2 管理費			
電話・通信費	250,000		
会議費	100,000		
事務用品費	300,000		
事務委託費	360,000	1,010,000	
当期支出合計(C)			2,810,000
当期収支差額(A) - (C)			△240,000
次期繰越収支差額(B) - (C)			324,491

(単位：円)